中国庭園の牆と門窓の特色

Feature of the Garden Wall and Gate・Window in China

河原 武敏

Taketoshi Kawahara

Key Words : 1. 特色 2. 牆・門窓 3. 中国庭園

1. Feature 2. Garden Wall and Gate・Window 3. Cina

はじめに

本文が対象とする「牆」は、庭園に関係する建物壁面または景区を分割する牆を意味し、「門窓」とは、牆の開口部である門洞と漏窓・空窓をいう。日本にこうした牆はあまり見受けられないが、中国庭園にとっては独特の庭園構成に必要な施設であり、またそれが作る框景は注目に値する。本文はその基本として応用される計成の《園冶》を主として、その特色を明らかにしたい。

1. 牆と門窓の意義

(1) 景の造成

園牆に直接門窓を設置する理由に框景の効用がある。これは牆の内部を絵の様に見せながら、来園者を或る境地に誘うことは独特の景觀手法としてよく知られている。

この一幅の框景を作るため、明末清初の著名な造園家計成の《園冶》には、「門窓の框の中は磚を磨いて作り、その様式は当時の流行にしたがって造るべきである。これによって建物が新しく変るばかりか、庭園も更に雅趣を増す」とあり、牆に設けられた門窓の存在効果を重視している。そして技術者の腕の見せ所であるとし「工事精緻

さは、主として瓦職人によるものであるが、その計画は人を得て始めて出来るのである」とあり、それを計画段取りする設計者の存在を重視している。更にその装飾について「洞門に彫刻は嫌われるが、窓は細かく工夫して作るべきである」としている。

このように牆に門窓を取り付ける理由は、単に人の出入りや通風採光ではなく、外景を生きた画面のように額縁の中、即ち框景へ納める効果を期待することにある。そのため単調な牆面に生動ある趣を作るよう、通路に門洞、格子のある漏窓、格子のない空窓〔洞窓〕を設け。景の造成に寄与している。

廊沿いに門洞、漏窓、空窓を設け、庭景を見え隠れさせる例に蘇州の留園がある。延長 700 余mの廊下に見せる 30 余の異なるこれら開口部は、各々鑑賞の重要な見どころとして注目されている。

(2) 審美的価値

(i) 隔景作用： 大規模な庭園では「園中の園」を設ける場合が多い。一般に「子園」と称され、それを仕切る園牆は洞門、漏窓、空窓とともに周囲の景色と虚实対比の作用を作る。ここでいう虚实とは「虚の中に実

がある「実の中に虚がある」という意味で、この種の空間効果は多重景観を構成し「有界非界」「小中見大」「変化無究」の効果を作り出している。

(ii) 借景作用：牆面に取り付けられた開口部背後に景石や竹木を配置し、窓から恰も画のような框景を作り出す。これを「景中有景 画中有景 是画是景」と称し、その作用と工法に付いて《園冶》には「門窓の框内は磚を磨いて作る。人が園内の景致に遇うと奇想が湧き、心の中に情を秘めた風致が加わる。例えば軽い紗を張った窓の外に碧玉の緑がめぐり、柳の若葉も覗いている。目前の大きな石が人を迎え、あたたかも別天地を作る。風で竹影が揺れ、笙の音が聞こえてくるようだ。——窓前の所々に空き地を置き景物を近くに配置するとよい」とある。これらは明末清初の頃から江南の庭園で大きく発達し、中国庭園の優れた技法の一つとして今に伝えられている。

2. 園牆について

(1) 目的

「園牆」は磚、石、版築等を積んで園内を仕切る壁体をいう。これは単なる隔壁ではなく、独特の景観を作ることでもある。これに就いて《園冶》巻6 牆垣の項には「従来の牆垣はすべて工匠まかせであり、精巧な花鳥、神仙、怪獣などを彫刻している。このようなものは庭園でも堂前でもよいとはいえない」と過度な装飾に注意している。

園牆設置の目的は一般に建物や景物が高密度に分布しているため、変化に富んだ園景を作るには、園牆で幾つかの景区に区分し、景物の多重変化を少しでも増やす必要があり、「園中有園 景中有景」を作る重要

な役割を果たしている。

(2) 造形の工夫

牆は単調で重苦しいので次のように造形上の工夫がなされている。

(i) 形態の変化：地勢に合わせ、平坦地には「平牆」、斜面には「階段牆」〔梯級牆〕。必要に応じて「高牆」「低牆」を高低結合し、或は牆の威圧感を避けるため上部に生動起伏する波形状の「雲牆」「龍牆」を設ける場合もある。

その有名な例に上海の豫園の「龍牆」があり、狭い園内に「小中見大」の効果を与えている。牆上に4種類の龍が牆の上部に設けられ、その1は点春堂と万花楼の間で、龍頭の下に彩雲が天空に跳ね上がる「穿雲龍」。その2は大假山背後の牆上に潜み、機会あれば起き上がろうという「臥龍」。その3は和煦堂の西側にある民族色豊かな珠を持つ2匹の「双龍双珠」。その4は内園にあり青瓦の藍天に白雲のような「白龍」である。

(ii) 淡雅な色彩：景物を引き立たせるために牆面を清楚な白色とし、その上に黒色の屋根瓦を葺いて色彩を淡く目立たぬよう配慮される。特に白牆の牆面は画紙に見立てられ、牆前に置かれた山石や花木を絵のように輪郭を際立たせ、更に壁面へ映る影の変化に趣を感じとっている。これを「粉牆為紙 以石為絵」という。

(iii) 牆面に門窓：牆面には框景を造る洞門・漏窓・空窓を取り付け、さらに付近に山石花木を脇添えして、単調な牆に変化を与えている。

(3) 構造と工法

牆の構造には様々ある。南方の庭園では高温多湿に適した薄壁の中空牆が多い。皇

家庭園の紅色や勅願寺の黄色など華美な色彩に対し、私家庭園は白色の牆、灰色の棟瓦、褐色の門窓が組み合わされて地味ながら落ち着いた色彩が用いられる。昔から伝わる工法を《園冶》では次のように述べている。

(i) 白粉牆：「表面に紙の繊維と石灰を混ぜて塗布した牆である。時には光沢を取り去り、白蠟を塗り、面を平らに磨きあげる。よく用いられるのは、江湖の黄砂を下地に石灰を少しばかり塗り、更に薄く石灰を前面に塗布して、麻箒木で軽く擦ると自然に光沢が出て鏡のようになる。もし汚れたなら洗い去ればよい。かくて鏡面牆という。」とある。ここでいう「江湖」とは長江と洞庭湖のことである。

(ii) 磨磚牆：「正門内を隠す照牆や庁堂前の牆面に用いられ、水磨磚や四角の磚を斜めに貼り付ける。或は方磚を八角に切つて隙間に小方磚を嵌めたり、或は小磚の中に半分の方磚を挟んだり、または花形に築いて錦のような紋様にする。牆頂には水磨きの軒用方磚を幾層にも積み重ねる。牆に花鳥、神仙、怪獣だどの彫刻は用いない。画意が少ないからである。」

(iii) 漏磚牆：「凡そ眺望のよい所にこの牆を設ける。これは内景を隠して外から見えないようにするため、昔は切斷した瓦で連銭、疊錠、魚鱗などの模様を作ったが今は一般に行われていない。」「連銭」は2つ以上の円を連結した模様。「疊錠」は元代の銀貨幣である銀錠の模様をいう。

(iv) 乱石牆：「この牆は乱石を積み重ねて造る。乱石には黄石が最も適し、大小の石は互いに間隔をあける。この牆は假山の間に交えて造るのがよい。青石で乱石牆を造

るには、油灰で接着させ、この種のものを氷裂牆という。」ここでいう「油灰」とは石灰に桐油を混ぜた接着剤のことである。

(v) 漏明牆：「これには凡そ16式ある。思うにその中から堅固なものを採用すればよい。欄干式の中から造るものもあるが、この中から採用するわけではない。それは様式が重なる恐れがあるからで、この種の牆には磨磚造りが最適である。」とあり26種が図示されている。この牆は北方で「花磚牆」「透空牆」、南方の蘇州から上海一帯では「花牆洞」「透空磚牆」ともいわれている。

これら種類のうち「漏磚牆」と「漏明牆」について、陳植と張家驥はこの2種類は同じ牆として解説している。

3、洞門について

(1) 目的

「洞」の意味は、洞窟のほかに貫通した穴から見通すという意味がある。したがって「洞門」とは、牆に開けられた出入り口から内部が見通せる門をいう。「洞窓」も同様の意味をもつ。これらは来園者の進路誘導を果たすと同時に、門内の景物を見通して美しい框景を作り出すことができ、日照の変化によって多彩な影が牆に映る。このように牆を庭園空間に挿入すると、多重の奥行きを作る効果が生じる。

(2) 形状と種類

来園者の出入りする所なので、その高さや幅に注意する必要がある。洞門下部は地面に接し、人の幅よりやや大きめに作る。その形状は一般に縦向きで門扉は付けない。とくに主要景区を構成する洞門には、簡潔で直径の大きな円洞門と八角洞門がよく用

いられ、歩廊や小規模の中庭では軽妙な縦長形、圭形、長八角形が多く、隅飾りにも変化を付ける

種類には直線型、曲線型、混合型がある。多くは通行しやすい左右対称形で、庭園の意境に合わせ様々工夫されている。《園冶》では洞門の形式について「予がこれを伝へないと、忘れ去られる心配があるので、次の図に示しておく」と記しているが、その心配は杞憂に過ぎず、今なお多くの形式が工夫されている。つぎに《園冶》で紹介する洞門形式を【図1】に示す。

(i)方門合角式：「昔は磨磚を用いた矩形門はアーチ作りの工匠に任せて作った。それには磚の上に石を横架させた過門石、または角材を架した過門枋を置いたものであった。現在の矩形門は、木釘を用いてつなぎ、過木枋の上で磚とホゾを合わせる。そうすれば見るべき雅致が得られる。」とあり、横架材を架設にも使用したらしい。

(ii)圈門〔券門・アーチ門〕式：「凡そ磨磚の門窓は必ず牆の厚薄を計り、磚の大小を考える。アーチ内の磚面は露出しているので、すべて研ぎ出した磚を用い、縁辺は一寸ほど厚くする。」磚の外縁以外は石灰を塗るか、或はすべて研ぎ出しにする。《園冶》の指図には「縁辺は一寸ばかりにし、内側はすべて研ぎ出し仕上げにする」と記している。

(iii)上下圈式：《園冶》に示された図によると、「すべて門窓の縁には筋目を付ける」とある。

(iv)その他：《園冶》で図示された諸形式には、入角式、長八方式、執圭式 葫芦式 蓮弁式 如意式 貝葉式 劍環式 漢瓶式4種 花觚式 耆草式 月窓式 片月

式 八方式 六方式 菱花式 如意式 梅花式 葵花式 海棠式 鶴子式、貝葉式 六方嵌梔子式 梔子花式 罐式がある。このほかにも、長六角式 定勝式 桃式 瓢簞式〔葫芦式〕秋葉式などがあり、また長方式上縁の中央が突起し、或は3・5本の弓形を呈しているものや隅飾りを設けるものもある。中でも人の通行しやすい形式は円洞門(月洞門)と八角洞門で、来園者の多い所では楕円月門や横向洞門もよく採用されている。走廊や小院では直長、圭角、長八角など軽妙なものが多い。

(4) 磚框の工法

開口部の磚框には灰青色の方磚が嵌められ、その上に「線脚」を付ける。これには縮泔線、木角線、垂面、渾面、文武面などの形式があり、また方門合角式洞門の上部隅を飾るものに門景もある。

縁框の工法は、まず方磚の背面に蟻継の溝を掘り、板に柄を作つて溝にはめて重量を受け、板尻はそのまま牆の本体に組み入れる。縁框の面取りは、磚用の鋸や鉋で円面を作り、細目の砥石で滑らかに磨きあげる。取り付け後はパテで目地を詰め、更に豚血を混ぜた磚屑を磚の表面と面取りの隙間に詰め、最後に乾燥し細目の砥石で再び滑らかに磨き仕上げる。

4. 漏窓と空窓について

(1)定義

「漏窓」は「花窓」とも称される。これは窓に取り付けられた格子紋様から外光が漏れ、変化に富んだ陰影が生じて趣深い。格子のない窓を「空窓」または「洞窓」「月洞」とも云われ、窓の目的である通風採光以外に、生き生きした美しい外景を額縁で

切り取った絵のように見せる。そのため小規模の中庭では窓の背後に小空間を設け、石峰、芭蕉、竹、花木などを配置し、窓から見て一幅の絵画のように作ることが多い。これには扉は取り付けない。

(2)効用

窓の高さは一般に 1.5m 内外、下框までは床面から 1.3m 程度のものが多い。この高さは窓を通じて外の景物を眺めるのに適している。通風採光専用の窓はかなり高い。牆で隠された美しい景の一部を窓から採りいれ、身近に自然空間を感じさせる。

(3)形状

窓の外形は環境に応じて横向き、縦向き、正方形など様々な形状がある。幾何学図形には直線、孤線、円形、六角形、八角形、扇形があり、その中の直線は万字、定勝、六角景、菱花、書状、縹環、橄欖、氷裂紋など。孤線は魚鱗、銭紋、球紋、秋葉、海棠、葵花、如意、波紋などがあり、これらの混合には夔紋、万字海棠、六角穿梅花、灯景などや特殊なものに琴、碁、書画などを幾何学図形で囲んだものもある。また自然図形には花卉類の題材が多く、松、柏、梅、竹、蘭、菊、牡丹、芭蕉、蓮、仏手柑、石榴など。鳥獣の題材には獅子、虎、雲龍、蝙蝠、鳳凰など、人物故事の題材には小説伝奇・仏教故事・歴史伝説、劇中の一場面などがある。複合図形には、六角と穿花、松と鶴、柏と鹿なども目にし、これら紋様数は蘇州だけで数百種は下らないといわれている。その代表的な例を庭園別に紹介すると、【図 2】のようである。

その他、特殊なものに「什錦窓」がある。これは庭園内外に框景を作り、牆に取り付けた窓の内外にガラスをはめ、それに絵を

画き、中に灯具を置いて明かり窓としたものである。これは北方の四合院に多く、江南でも見受けられる。

建築に多い「空窓」には簡潔素朴な横長、縦長、方形のものが多い。また連続して歩廊に取り付ける空窓は、あまり大きくなく、形式は様々で配列も疎密取り混ぜて単調さを避けている。

(4)工法

幾何学図形の紋様窓は瓦片、薄磚、木材などで作る。その短直線には化粧軒下地磚を使い、長さの不足や複雑な什錦紋には木片や孤線など種々な瓦を用いる。また複雑な自然図形には、木片や竹筋、後に鉄筋、鉄棒、鉄板が用いられ、細部の仕上げには、骨組み上にモルタルや麻糸等を何層にも巻き付けて塗りこめ、セメントペーストやモルタルを重ねて形を整える。

ほかにガラスを嵌めた既製窓もあるが、これらは幾何学模様で耐久性はあるが単調なので使用例は少ない。

(4)李漁の框景窓

明末清初の計成(1582～)は「借景」を更に発展させ、牆に美しい外景を風雅な窓枠内に採り入れた風雅な窓を《園冶》に紹介し、庭園景觀の進歩に大きな足跡を残した。これを更に普及させたのは李漁(1611～1680)である。彼の著《閑情偶寄》には、「景を取るということは、それを借りることにある〔取景在借〕」と称し、「湖舫式」「尺幅窓図式」「梅窓」の 3 種類を提案し、その経緯を記して大いに世間の注目を浴びた。

(i)湖舫式扇形窓:彼が杭州西湖の傍らに住んだとき、自分の遊覧船に扇形窓を両脇に取り付け、「湖舫式」と命名し「船の左右

に扇面窓のほか開口部はなく、船に座ってさえいれば、兩岸の景色が扇に画いた“天然の画”のように見える。」というのがそれである。【図3】

(ii) 尺幅窓図式：また彼は庁堂内に新しく自然を入れる方法として「無心画」「尺幅窓」という框窓を作って人々を驚かせている。【図4】即ち「遂に侍童に命じて画紙を幾つも切裂き、窓枠のように上下左右に貼ってみた。これはあたかも一幅の画のようだが、それは虚であって実ではない。建物の背後のある山を画に代えたものである。座してこれを見ると窓ではなく画である。つまりその山は建物背後の山ではなく、画面上の山である。妻子達が集まって思わず狂ったような笑声があがった。私もまた大笑いした」と言うのがそれである。ここで云う“無心”とは「框ありて心なし」。“尺幅”とは「尺幅千里」の意味がある。

(iii) 梅窓：更に彼は枯れた枝に紙の梅花を貼り付けた漏窓を作った【図5】。「私は試みに枯れ枝を数本採って、天然の窓を作

り“梅窓”とした。——出来上がった後で、人工の花を剪って紅梅と緑萼の2つに分け、粗い枝と細い茎に取り付けたところ、あたかも生きた梅の花のようになった」とある。

結び

小規模の庭園ほど景区の変換点は工夫が必要である。本文では、中国庭園の牆とその門窓に見出し、その框景を含む効果と技法を考察した。この手法は明末清初の計成の《園冶》によって詳しく紹介されたもので、今なお様々な形態が工夫され、利用されている。

わが国でも古来、框景の技法は存在するものの、園の界牆に用いた例はあまり見当たらない。本文の考察はわが国の新たな施設計画の参考に供することが出来るものと考え。 以上

【図3】湖舫式

——李漁が『閑情偶寄』で提案した最大の発明は、「尺幅窓」であった。空隙をつくり、外側の景色をあたかも、山水画のごとく、室内へと移入させる。現在の「框景」である。

【図4】尺幅窓図式

——李漁は『閑情偶寄』で、扇状窓のついた舟を考察した。かれの言う「湖舫式」である。

【図5】梅窓

——窓に、梅をくくりつけ、風雅を呼び込む。李漁『閑情偶寄』の「梅窓」

(明・李漁《閑情偶寄》取景在借)

【図1】 蘇州に見る漏窓の例 [劉敦楨《蘇州古典園林》から再編]

【圖2】洞門〔(明)計成《園冶》隆盛堂版〕